東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

関係発達論に関する研究の動向

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2020-04-16
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 竹, 美咲, 村山, 拓
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/152429

東京学芸大学紀要　総合教育科学系　71: 275－284，2020.

関係発達論に関する研究の動向

竹　　美　咲*1・村　山　　拓*2

特別ニーズ教育分野

（2019年9月17日受理）

1．はじめに

1．1　なぜ関係発達論か

本研究は，国内における関係発達論に関する文献レビューを通して研究の動向を概観し，関係論的発達モデルの可能性と課題を明らかにすることを目的とする。

私たちは，人の育ちをどのように捉えているだろうか。関係発達論は，従来の発達観に対する問題意識から生まれた。従来の発達観は，子どもという未完成な状態から大人という完成した状態へ，一方向に能力を獲得していくという個体能力主義な見方が主流であったとされている。そのような発達観に対し，関係発達論とは，人の育ちを「育てる者－育てられる者」の相互的なやり取りの中で両者ともが一生涯に亘り変容していく過程として捉えようとする発達観である。関係発達論は，関係発達，間主観性，両義性，主体性（相互主体性）の4本の柱によって構成され，鯨岡（2016）は発達を「人間の一生涯に亘る身・知・心の面に現れてくる成長・変容の過程である」と述べる（p.31）。

本稿では，新たな発達観として提唱された関係発達論が約20年の間どのように研究されてきたかを整理する。また関係発達論に関する研究動向を捉えた上で，今後の方向性について考察する。

1．2　研究方法

本稿では，関係発達論に関する文献のレビューを行う。文献収集は，学術論文データベースCiNiiを利用した。「関係発達」をキーワードとして検索すると，245件の文献が抽出された。その245件から，学術論文と，引用文献または参考文献が明記されている雑誌記事を抽出し，さらに内容を精査し「関係発達論」に関連のある文献を抽出すると51件となった。最初に「関係発達論」の用語が用いられている文献は鯨岡（1993）で，関係発達論と直接的に関係のある初期の文献も同論文であった。そのため，分析の対象期間は1993～2019年8月現在までに発表された文献とした。なお，同一著者らによる内容の大幅に重複する2件については，査読を経たと明記されている，後に刊行された方の論文を分析対象とした。上記により選出された文献51件を以下レビューする。

2．研究の動向

2．1　文献数による概観

関係発達論に関する研究の動向を掴むため，文献を年代と大まかな研究内容で分類した（表1）。

表1　文献数の分布

発行年	総数	文献の分類		区分		領域		
		学術論文	雑誌記事等	臨床	理論	保育	療育	教育
1993～2000	3	3	0	2	1	0	1	2
2001～2005	11	3	8	9	2	1	9	1
2006～2010	15	8	7	8	7	1	11	3
2011～2015	12	10	2	9	3	2	9	1
2016～2019	10	9	1	8	2	1	6	3
合計	51	33	18	36	15	5	36	10

すべての文献を時系列で整理すると，2000年以前は3件，以後5年毎に区切ると，2001～2005年の間は11件，2006～2010年の間は15件，2011～2015年

＊1　東京学芸大学 個人研究員
＊2　東京学芸大学 特別支援科学講座 特別ニーズ教育分野

の間は12件，2016年以降は10件が発表されている。

年代別の総数からは，2001年以降，文献が増加していることが分かる。この文献数の増加には，鯨岡（1993）が発達研究領域におけるパラダイム転換の動向を整理し「関係発達論への転向」と題したこと，鯨岡により執筆された博士論文が1999年に『関係発達論の構築』と『関係発達論の展開』の２冊にまとめられ書籍として出版されたことで，関係発達論の概念が広まりをみせたと推測される。

２．２　分類毎にみる動向：学術研究の増加

次に，文献の分類毎に動向を概観する。分析対象には研究論文や雑誌記事等，幅広い形式の文献が含まれているため，本節では学術論文と雑誌記事等の２種類に分類した。分類方法は，まず分析対象としたすべての文献のうち，文献の形式に原著または研究論文と明記されているものを学術論文に，シンポジウムや講演録，報告書等は雑誌記事等に分類した。次に，以上に当てはまらなかった文献については，発表媒体が学術研究を主たる目的とした雑誌であるか，引用または参考文献に著者以外の文献が含まれているか，研究論文としての手続きがとられているか（臨床研究では実践にあたっての手続きが明記されているか）の３点から総合的に判断し，いずれかに分類した。

学術論文を時系列で整理すると，2000年以前の文献は３件，2001～2005年の間は３件，2006～2010年の間は８件，2011～2015年の間は10件，2016年以降は９件である。雑誌記事等を時系列で整理すると，2000年以前の文献は０件，2001～2005年の間は８件，2006～2010年の間は７件，2011～2015年の間は２件，2016年以降は１件である。

この推移からは，学術論文として2000年以前に鯨岡らにより提示された関係発達論が，2001年以降まず雑誌記事等として取り上げられ，2006年以降は，学術論文として広まりをみせていることが伺える。2016年以降は，2019年８月現在までの３年８カ月間を分析対象期間としているが，既に９件に達している。以上から，関係発達論を扱う学術論文は増加傾向にあると言えるだろう。学術論文の増加からは，鯨岡（1999a,1999b）らによって構築された関係発達論が，新たな発達観になじむ理論として，教育に携わる研究者たちに捉えられてきていることが推測される。

２．３　発達観の転換：個体能力発達から関係発達へ

関係発達論の出現に深い関わりを持つ，発達観の転換に焦点をあてて検討する。発達研究におけるパラダイム転換と重なる動向として，南部（2007）は世界保健機関（WHO）が2001年に改訂した国際生活機能分類（ICF）や，2001年施行の幼稚園教育要領や保育所保育方針を取り上げている。WHO（2001）は，これまで中心となっていた心身機能と身体機能の障碍に，活動と参加の制約という視点を取り入れ，障碍は個人因子と環境因子が関係し合うとした。このICFモデルへの改訂は，特別支援教育においても，障碍は個人の症状や診断結果だけでなく，その人と周囲の人また社会との関係性が絡み合っているという見方への転期をもたらしたという。南部（2007）は，2001年に施行された幼稚園教育要領や保育所保育方針では，「発達段階」や「発達課題」の概念が消え，一人ひとりの子どもの「発達の過程」が重視されるようになったと述べている。2001年以降，人の育ち（発達）に対する捉え方が国際基準もふまえた転換期を迎えたと言えるだろう。

この転換は，関係発達論の概念の核となる問題意識が鮮明に表された議論を含む。転換については，鯨岡（1993），南部（2007）らによって詳細な議論が整理されている。鯨岡（1993）は，従来の発達研究について，「新しい研究動向が次々に生まれながらも，しかし総体としての発達研究は既存のパラダイムのまま推移しているようにもみえる」と述べる。南部（2007）は，20世紀初頭以後の動向を整理し，21世紀に入っての子どもの発達観の変化にまつわる動向を虐待臨床研究の立場から捉え，虐待を受けた子どもの思いに寄り添うために関係発達論の視点から子どもに関わる必要性を提示した。

また，川瀬（1995），梅崎（2014），庄司（2006），稲垣（2006），鯨岡（2004b）といった研究では，それぞれの専門分野の立場から，この転換について言述している。各分野において，発達観の転換はどのように捉えられていたのだろうか。

川瀬（1995）は，対人的な関わりに難しさがあるとされる自閉症研究の立場から治療等の変遷を追い，関係発達論の視点を自閉症論の方向性として指し示している。自閉症の治療処遇は，言語認知障害説の台頭にともない，遊戯療法から行動療法へ移行した歴史を持つ。行動療法では，自閉症は正しい学習をすることで治療可能だとする前提に基づき，自閉症児の問題行動をさまざまな強化スケジュールを用いて修正したり，適応行動の学習等が行われる。川瀬は行動療法の問題点について，「個々の行動は訓練によって習得されたり修正されたりするかもしれないが，それらを使って日常の場面で主体がどう生きていくかという視点が欠

けたまま，やみくもに訓練が課せられるという状況を生み出している」と指摘している。この訓練を学びと捉え直すと，日常と切り離された文脈での能力の獲得を目指すという暗黙の方向性は，当時の自閉症研究だけに留まらず，根本的な課題である。行動療法の発達観では，発達を適応行動が単純に加算されることであるとし，適応主義的発想が基盤にあるという。川瀬は，このような状況に対して，発達研究における「個体能力論から関係発達論へ」のパラダイム転換が起こりつつあると述べた。そして自閉症論の目指すべき方向は，「子どもとはなにか」「発達とはなにか」「人とはなにか」という普遍的な問いの解明に繋がるものでなければならないとした。

梅崎（2014）は，保育実践の立場から，旧来の発達論と関係発達論の概念の相違を表に整理した（表２）。

表２「旧来の発達論と関係発達論の比較」（梅崎2014）

旧来の発達論での扱い		関係発達論で試みられる再定義
何かができるようになること	発達	育てられる者から育てる者になっていく課程
子ども	（発達の）主体	子どもも大人も
養護は３歳未満へ（／保育所で）の営為。教育は３歳以上へ（／幼稚園で）の営為	養護と教育	生涯発達の条件であり，不可分
おざなりにされてきた（能力獲得や拡大が優先されてきた）	心を育てる	子どもを育てる上でのただ一つの目標。私の心（自己性／能動性）と私たちの心（社会性）のバランスの良い育ちが目指される

旧来の発達論では、発達の主体は「子ども」とされ、発達は「何かができるようになること」として捉えられてきた。発達に関与する大人は、子どもの発達を支援する役割を担う者に過ぎない。そのような発達観に対し、関係発達論は、「子どもも大人も」ともに発達する主体であり、発達とは「育てられる者から育てる者になっていく過程」として捉えられる。これまで能力獲得や拡大が優先され、おざなりにされてきた「私（自己性／能動性）と私たち（社会性）」のバランスの良い心の育ちが目指される。そのため保育分野においても、保育所では養護、幼稚園では教育と単純に分けることはできないとする。梅崎は、これらの概念を確認した上で保育園での事例検討を行い、社会的課題を設定する保育によって子どもの「できる—できない」が顕在化されていること、そして保育士が無自覚のうちにそのような保育を余儀なくされている現状を問題点として挙げた。そして発達心理学は、子どもの発達を個に閉じた能力獲得・拡大の過程と描いてきた歴史をもつとし、以上の問題に対して「一定の責任を有する」と述べている。

庄司（2006）は，ライフステージという概念が発展した背景を切り口に，生涯生態学，発達生態学，関係発達論について動向を整理した。その上で関係発達論が，生涯生態学や発達生態学と共通し，人の発達観の再考にせまった動きであると捉えている。

稲垣（2006）は小児科医の立場から，医療現場においても身体疾患に重点が置かれてきたという，乳幼児期の育ちについて理論面から整理し，心の発達を含んだ包括医療の再考を試みている。稲垣は，これまでの発達研究が，子どもの発達を発達段階として捉えることで，医療現場では発達障害児の早期発見・早期療育へと繋がったと捉えている。しかしその一方，「これからは目の前の子どもといかに過ごし子どもの育ちに寄り添えるか」という視点へと，小児医療での発達観の転換について述べる。

従来の発達観による教育全般への影響について，鯨岡（2004b）は，教育の営みが，不登校やいじめ，障碍児など，平均から偏倚した子どもの問題を常に「子ども側の問題」として捉え，子どもを平均像に復するように矯正教育的，発達促進的な働きかけに終始してきたと指摘する。そして，そのような教育の基調には，誕生した乳児が能力的に完成された大人になっていく過程が発達だとする従来の個体能力発達の見方が，強い枠組みとして働いていたと指摘している。

子どもの育ちに直面する臨床の場の問題を核として，個体能力では捉えきれない発達を捉える発達観として，関係発達論は位置づけられる。

２．４　関係発達論の課題

このような個体能力発達の見方に対する批判から生まれた経緯がある一方で，関係発達論の課題点についての指摘もある。

細渕（2008）は重症児教育の視点から，重症児は生きることそのものに深刻な苦しみを抱えた子どもであり，療育に携わる者は彼らの痛みや苦しみがわかるがゆえ，意図的・系統的な働きかけを躊躇してしまう場合もあるという。かわいそう，辛そうといった感情から，ただ楽にするための介護中心のかかわりとなり，結果的に障碍の軽減や発達を促す指導を軽視してしまう場合があることを取り上げる。関係発達論が，能力発達を否定的に取り扱うことによって，障碍にかわっ

て生じる困難すべてを関係の問題に解消してしまう危険性を指摘する。

関係発達論を構築した鯨岡（2004a）自らも，現場での実践の難しさについて触れている。保育の場が，子ども一人一人を一個の主体と受け止め対応するという面と，集団生活の楽しさへと導くという面との，異なる2つの側面をもっているとし，この両面性を人の両義性と捉えている。「集団を動かそうとすると，一人一人に目を向ける余裕がなくなり，また能力を伸ばそうと身構えていれば，ついつい『させる』働きかけをして，それを『子どものためだ』と合理化してしまいがち」であると述べる。また，「私たちはみな，『子どもによかれ』と思って働きかけますが，そこには子ども側から見て，『やりたくない』『面白くない』『いやだ』ということも多々ある」に違いないと指摘する。鯨岡は「子どもの気持ちを受け止めて」という主張は，たんに子どものあるがままでよいという現状肯定を意味するのではないとする。子どもが今を乗り越えて成長を遂げていくことは，関係発達の立場でも当然ながら喜ばしいことであるとした上で，「ただ，その能力の伸びにだけ目を向けて，子どもの気持ちを無視ないし軽視したままでの保育や養育は，長い目で見れば必ずやもっと大きな問題や壁にぶつかってしまう」と警鐘を鳴らす関係発達論は，大人からの視点へ比重が傾いている現状の教育の見方を，子どもの立場から捉え直すことで，人の両義性の均衡を取り戻そうとする動きであると捉えることができる。

3．研究の内訳

本節では文献を臨床研究と理論研究に二分した。実践や事例を取り扱っている文献はすべて臨床研究に分類し，それ以外は理論研究に分類した。臨床研究は36件，理論研究は15件となった。

浦崎・武田（2017a）が対人関係に伴う支援を行う多職種での関係発達的支援の応用の可能性について述べている通り，関係発達論は医療・福祉・教育等，領域を越えた臨床での応用が試みられている。本稿では全51件を保育・療育・教育の3つの領域に分類した。

分類基準は，文献中に「保育」と明記されているものは保育に，広義の障碍への治療や教育を取り扱っているものを療育に分類し，その他教育全般に関するものは教育へ分類した。なお，藤井・勝浦・山崎・平野（2010）の共同研究に関しては，各執筆者の実践フィールドの領域が異なっていたため，例外的に各執筆者ごとに領域を分けてレビューしたが，領域ごとの集計は教育に入れた。以下，領域ごとにレビューを行う。

3．1　保育における関係発達

梅崎（2014）は，保育実践の立場から，次の2点を問題視している。「(1) 保育士が半ば無自覚のうちに，社会的な課題を設定する保育を余儀なくされている。(2) 社会的な課題が設定される保育によって，子どもの〔できる－できない〕が顕在化されている」。以上を問題意識として，保育における実践について検討し保育における両義性について述べている。この両義性に関しては，「発達や，発達を支える『よい保育』の定義が揺れるのは，価値観が多様化する時代にあるからこそである」とも述べる。

藤井・勝浦・山崎・平野（2010）の間主観性の概念の内実を探る共同研究の中で，藤井は保育研究の立場から，保育園における関与・観察で出会ったある子どもとの具体的な関わりの一場面を取り上げ，考察している。保育の場において自ら身体的主体として子どもとの具体的な関わりを生きる者として，行動の記述では捉えきることのできない，その場の情動を含んだ相互的な関係性の機微を描きだしている。考察の対象には著者がこの場面を取り上げたこと自体も含まれており，子どもの自己形成に著者自身が主体として関わる存在であることから，関わり手の応対が子どもの体験を変えることについての実感に基づく考察と問いが立ち上げられている。藤井は，保育現場での子どもの育ちを捉えようとする研究について，「未だ可視的な行動水準での考察によるものが多く，不可視である主観的水準で子どもの育ちを描き出す研究はまだ少ない」と述べる。そして，この現状について「関係性そのものを描きだすというよりも，関係を通した個人内の諸能力の発達を捉える，という在り方に留まる関係性概念の浸透と換言できる」と指摘する。

3．2　療育における関係発達

自閉スペクトラム症に関する研究については，臨床研究の中でも13件と最も件数が多く，盛んに行われている領域である。例えば，発達障害児の臨床研究は，藤井・勝浦・山崎・平野（2010）の共同研究の中で，勝浦による普通学級に在籍するアスペルガー症候群と診断を受けた生徒の事例や，山崎による自閉傾向のある生徒の事例が取り扱われている。

被虐待児の臨床研究は，南部（2004，2007，2008）らによって行われている。南部（2007）によると，これまでの虐待研究における関係性については，親子の愛着関係が論じられてきたという。しかし，虐待臨床において，親と子どもの行動観察から愛着形成の発達

段階を測ろうとする従来の客観的立場は不充分であると指摘する。南部（2004，2008）によるプレイセラピーの臨床実践を踏まえ，「虐待を受けた子どもは，関係性に寄り添う方向性，関係に対する支援があって初めて，これまでの虐待的な人間関係から離れ，自分を主体として見つめ始める」と，子どもの発達を関係発達の視点から捉える必要性を唱えた。

また，上記以外の領域での臨床研究としては，榊原（2013a）によるWest症候群（点頭）のある子どもおよび養育者への関係発達臨床の取り組みや，藤井・勝浦・山崎・平野（2010）の中では平野により筋ジストロフィーの生徒の事例，渡辺・本城（2002）による精神分裂病者を対象とした音楽療法の取り組み等がある。

また，成人を対象とした臨床研究には，中島（2017）による知的障碍の成人と母親への関係発達支援の取り組みがある。中島（2017）によると，知的障碍や発達障碍に関する母子関係に対する心理療法の実践は，これまで乳幼児期や児童期の子どもと親の事例が大半であったが，知的障碍者の成人期においても関係発達の視点からの支援の必要性を述べた。中島はプロセスを支え促した心理療法の主要な機能をWinnicott（1965／1977）による“holding”の概念を参照して考察し，北山（1985）による，holdingの重複し合う意味内容を敢えて「便宜的に分解」した諸記述を基に，経過に即してそのつどいかにセラピストがholdingしたかを分析的に検討している。その上で「自己発達支援において関係性へのアプローチは不可欠である」とし，特に，発達障碍児者の自己発達支援が注目されているなか，holdingを主たる機能とした関係性へのアプローチが成人知的障碍者の自己発達を促進する可能性を示した。また，「今後，成人知的障害者の関係発達支援について，臨床技法の発展を目指すとともに，当事者の主体的判断を尊重する研究協力同意の手続きの工夫など研究方法の発展に努めたい」と研究方法についても批判的に捉え，今後の課題として述べた。

３．３　教育における関係発達

藤井・勝浦・山崎・平野（2010）は，それぞれの報告から「共通して言えることは，『間主観性』という観点から具体的な関係の綾を描くことは，二者のあいだの『共有される体験』を主題化することに他ならないということである」とし，「子どもの自己形成過程における意味に着目した発達研究における『間主観性』概念の現状と可能性については現段階の示唆を，①その過程に他者が介在してくる現実を描くことが必要となり，自己理解と他者理解が絡み合って形成されてくる実態を描き出すことにつながる。②研究者が，人が生きる現場で行き交っている『間主観性』を主題化し描き出すことは，研究者自身にその場をアクチュアルな身体で生きることを求める。③保育・教育の場で生きる者たちの『間主観性』を取り上げることは，行動観察の枠組みでは捉えきれなかった水準での実践者の『育てるまなざし』を掬い上げ，『育てる者』の営みを省察する契機となる」と述べる。

関係発達論を応用した研究としては，宮本（2019）による情報環境の構築のための算数・数学の授業実践といった独自の取り組みも行われている。

３．４　研究の方法について：エピソード記述の扱い

研究方法として代表的なものは，鯨岡（1993，1999，2005）による「エピソード記述」がある。エピソード記述を取り上げている文献は，鯨岡（1993，1999），近藤（2011），榊原（2011，2013b），塚田（2015），の６件である。なおCiNiiで「エピソード記述」をキーワードとして検索すると，148件の文献が抽出される。この普及の背景には，実践の場で「伝えざるをえない」出来事に出会うも，伝える手法がなくこれまでアウトプットが困難だった実践者がエピソード記述によって実践をアウトプットできるようになったことが考えられる。実践者の必要に迫られて普及している手法であると言えよう。ただし，手法としてのエピソード記述は普及しているが，関係発達論についての概念的な関連については，慎重な検討が必要である。

鯨岡（1999）は，研究におけるエピソードについて「慎重に吟味され，精選され，本質との出会いの迫真性に裏付けられたエピソードは，発達研究の重要なデータであり得る」とする反面，「一歩誤ると，恣意性と曖昧性に捉えられてしまう可能性を抱え，捏造への危険にも晒されている」とエピソード記述の置かれている立ち位置について述べている。関係発達論の視点を取り入れる際，安易にエピソードを取り上げることが研究のデータとしてどれほどの信頼性を持ちうるかは，常に意識される必要がある。

４．まとめ

４．１　関係発達論に関する研究の動向

鯨岡（1999）によって構築された関係発達論に関する学術論文は増加傾向にあり，発達観の転換として教育・医療など分野をまたぎ研究者や実践者に受け入れ

られてきたことが明らかとなった。

しかし関係発達論を発達観の転換として捉える研究がある一方で，中には表面的な関係発達論の理解によって最終的に能力主義に回収されている論文や，行動水準での分析に留まる臨床研究も見られている。

今後，関係発達論の視点による研究は進められ，臨床研究の増加だけでなく，新たな分野への応用などさらなる進展が予測される。その際，手法の形式的な部分のみを取り入れることや，実践者や研究者が自らの無自覚な発達観の偏りを意識せず進めることは，関係発達論が試みた発達観の転換と逆行する危険性がある。

４．２　今後の課題：関係発達論の可能性

能力を育てるという観点の発達支援と関係発達論は，対立関係にあるのではなく，むしろ両者が補い合う関係にある。しかし，今回の文献レビューでは，現在の教育の枠組みは能力発達的な発達観に偏っている可能性を示唆する点が見出され，これは筆者（第一著者）によるフィールドワークや参与観察等を通した実感とも概ね一致する。

教育において，何らかのスキル獲得を目指す目標志向的な学習は，スキルを獲得した後の社会がある程度推測可能であることが前提とされている。これまでも新しい技術の普及は従来の生活様式や常識を変化させてきたが，特に現代では情報の共有スピードが加速し，未来はより予測困難となった。従来の教育の前提自体が揺らぎ模索される中，関係発達論の視点は今後さらに重要となっていくと思われる。予測不可能な未来を前に，育ち－育てるという営みも変化を問われているといえよう。

教育の現場において，人の育ちを支えるための両義性が保たれることで，先行きの見えない明日を，不安でなく生きる喜びや希望を多くの人が持ちながら迎えることができるフレームワークをつくることが重要ではないかと考えられる。今後，関係発達論の方法論的な検討と併せて，その可能性や事例検討の蓄積を通して，この問題に引き続き取り組んでいきたい。

５．謝辞

この研究を進めるにあたりご協力をいただいた皆様に感謝を申し上げます。

６．参考文献

石川大晃，田中大介（2019）「「親として育てられる」社会的枠組みの重要性とその再構築の試み」，『地域学論集：鳥取大学地域学部紀要』15（3），51-62.

市川友里恵（2007）「自閉症児の言語使用の経緯と他者との関係性：「てて」から「帰る」へ」，『大阪教育大学障害児教育研究紀要』30，65-74.

稲垣由子（2006）「乳幼児期における心の育ち」，『母子保健情報』54，47-52.

乾真実，小林隆児（2005）「落ち着きのない子どもへの家庭での教育：関係発達臨床の立場から」，『教育と医学』53（8），768-775.

梅崎高行（2014）「関係発達論に基づく保育実践と発達研究の協働」，『甲南女子大学研究紀要　人間科学編』50，15-24.

浦崎武（2009）「学齢期のアスペルガー症候群と関係発達的支援」，『そだちの科学』13，53-61.

浦崎武，武田喜乃恵（2016a）「学齢期の自閉症スペクトラム障害児への地域の特色に基づく支援：関係発達的支援と教育の実践に向けて」，『琉球大学教育学部紀要』89，209-216.

浦崎武，武田喜乃恵（2016b）「学齢期の自閉症スペクトラム障害児への関係発達的支援と「自立活動」による教育実践：「ともに楽しむ」体験と「向かう力―受けとめる力」を育む「トータル支援」」，『琉球大学教育学部発達支援教育実践センター紀要』7，133-152.

浦崎武，武田喜乃恵（2017a）「自閉症スペクトラム障害児の自己同一性の形成の解明と学齢期の関係発達的支援の開発：幼児期からの関係発達的支援および教育実践への展開に向けて」，『九州地区国立大学教育系・文系研究論文集』5（1）.

浦崎武，武田喜乃恵（2017b）「自閉症スペクトラム障害児への関係発達的支援による集団支援と教育実践：「トータル支援」を通した「過ごす力」と「向かう力」を育む支援論」，『九州地区国立大学教育系・文系研究論文集』4（1，2）.

大鐘啓伸（2011）「母子通園施設を利用した母親の心理状態：支援過程において障害児を持つ母親の表出された気持ちから」，『発達心理学研究』22（3），308-317.

大倉得史（2018）「育ち育てられる関係発達の視点」，『臨床心理学』18（2），164-168.

川瀬泰治（1995）「関係発達論としての自閉症研究」，『別府大学紀要』36，61-68.

北川可恵，光澤博昭，新谷朋子，海崎文，氷見徹夫（2013）「当センター母子入院における重複障害児の補聴器装用指

導」,『Audiology Japan』56, 171-177.
北山修（1985）『錯覚と脱錯覚：ウィニコットの臨床感覚』岩崎学術出版社.
鯨岡峻（1993）「発達研究の現在：関係発達論への転回」,『児童心理学の進歩』32, 1-28.
鯨岡峻（1999a）「初期「子ども－養育者」関係研究におけるエピソード記述の諸問題」,『心理学評論』42（1）, 1-22.
鯨岡峻（1999b）『関係発達論の構築：間主観的アプローチによる』ミネルヴァ書房.
鯨岡峻（1999c）『関係発達論の展開：初期「子ども―養育者」関係の発達的変容』ミネルヴァ書房.
鯨岡峻（2004a）「関係発達論と保育のあり方」,『ママとままま』12, 5-47.
鯨岡峻（2004b）「次世代育成の諸問題：いま，何を育てる必要があるのか」,『教育学研究』71（3）, 302-313.
鯨岡峻（2007）「発達障害とは何か：関係発達の視点による「軽度」の再検討」,『現代のエスプリ』474, 122-128.
鯨岡峻（2016）『関係の中で人は生きる：「接面」の人間学に向けて』ミネルヴァ書房.
小林浩之，上野ひろ美（2008）「関係論的把握に基づく「子ども－保育者」関係の一考察」,『奈良教育大学紀要　人文・社会科学』57（1）, 73-79.
小林隆児（2003）「関係発達臨床からみた自閉症とことば」,『そだちの科学』1, 34-41.
小林隆児（2004）「自閉症に対する育児支援：関係発達臨床の立場から」,『乳幼児医学・心理学研究』13（1）, 29-39.
小林隆児（2005）「関係発達臨床からみた自閉,多動,虐待」,『小児の精神と神経』45（3）, 209-229.
小林隆児（2006）「関係発達臨床からみた自閉症とことば」,『子どもの健康科学』7（1）, 16-20.
小林隆児（2008）「関係発達臨床からみた共同注意」,『乳幼児医学・心理学研究』17（1）, 49-59.
小林隆児（2011）「ひきこもりと広汎性発達障害：関係障害に対する関係発達支援の実際」,『そだちの科学』17, 67-74.
小林隆児（2013）「「甘え」のアンビヴァレンスと心理療法に関する関係発達臨床からの検討」,『大正大學研究紀要 仏教学部・人間学部・文学部・表現学部』98, 11-13.
小林隆児（2017）「発達障害の精神療法：その難しさはどこにあるのか」,『西南学院大学人間科学論集』12（2）, 147-171.
小林隆児，井上 玲子，稲岡 勲（2005）「発達障害児の育児支援における母子交流の質的検討の重要さ」,『母子保健情報』51, 19-25.
小林隆児，勝又基与美（2006）「関係発達臨床の立場から：ある高機能自閉症の子をもつ母親の手記より」,『そだちの科学』7, 30-42.
小林隆児，鯨岡 峻（2005）『自閉症の関係発達臨床』日本評論社.
近藤（有田）恵（2011）「実践を支える研究：関係発達論とエピソード記述が持つ意味」,『育療』48, 25-32.
榊原久直（2011）「自閉症児と特定の他者とのあいだにおける関係障碍の発達的変容：相互主体的な関係の発達とその様相」,『発達心理学研究』22（1）, 75-86.
榊原久直（2013a）「前言語期のWest症候群のある子どもへの心理臨床的関わりへの一考察：関係発達臨床の視点から」,『心理臨床学研究』31（3）, 421-432.
榊原久直（2013b）「自閉症児と特定の他者とのあいだにおける関係障碍の発達的変容（２）：主体的能力・障害特性の変容と特定の他者との関連」,『発達心理学研究』24（3）, 273-283.
庄司順一（2006）「ライフステージと心の発達」,『母子保健情報』54, 19-23.
城間園子，浦崎 武（2008）「発達障害児への関係発達的支援アプローチ：子ども・母親の情動に焦点をあてた支援を通して」,『琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要』9, 161-173.
田中康雄（2005）「AD/HD臨床から：生きにくさの検討」,『小児の精神と神経』45（4）, 326-330.
財部盛久（2003）「母子関係発達支援の立場から」,『そだちの科学』1, 72-78.
塚田みちる（2014）「実習における〈子ども－実習生との関係〉の検討：保育実習・教育実習での体験をエピソード記述で描く」,『神戸女子短期大学紀要 論攷』59, 1-16.
塚田みちる（2015）「乳児の情動の調整における〈調整する－される〉という関係の検討：生後半年間における三世代の関わりをめぐって」,『神戸女子短期大学紀要 論攷』60, 17-31.
中島由宇（2017）「知的障碍をもつ成人女性と母親への関係発達支援」,『心理臨床学研究』35（4）, 410-421.
南部真理子（2004）「子どもの虐待における人間の関係性：プレイセラピーにおける「枠組み」づくりの再構築」,『甲南女子大学大学院論集 人間科学研究編』2, 101-108.
南部真理子（2007）「虐待を受けた子どもの関係発達論：関係発達臨床から」,『甲南女子大学大学院論集 人間科学研究編』5, 53-65.
南部真理子（2008）「虐待を受けた子どものプレイセラピーにおける「枠組み」の再構築」,『福祉心理学研究』5（1）, 25-36.
藤井真樹，勝浦眞仁，山崎徳子，平野拓朗（2010）「関係発達研究にかかる「間主観性」概念の現状と可能性：子どもの自己形成過程における意味に着目して」,『研究開発コロキアム：平成21年度 成果報告書』, 136-145.

細渕富夫（2008）「重症児教育（療育）実践の動向と課題」，『障害者問題研究』36（3），172-179.

三原敏孝（2007）「自閉症児の遊戯療法過程：関係発達論の視点から」，『大阪教育大学障害児教育研究紀要』30，75-84.

宮本俊光（2018）「算数・数学の授業実践のための関係発達論に基づく情報環境の構築」，『日本科学教育学会研究会研究報告』25（5），31-34.

吉田安規良，中尾 達馬（2017）「沖縄こどもの国と連携した教職実践演習における学生の変容の実際：学生は教職実践演習で自他をどう見取ったか：2015年度の報告と４年間の取組の総括」，『九州地区国立大学教育系・文系研究論文集』5（1）.

渡辺恭子，本城秀次（2002）「音楽療法における関係発達に関する一考察：精神分裂病患者を対象とした音楽療法から」，『日本芸術療法学会誌』32（1），5-11.

渡部千世子（2012）「慢性腎疾患の子どもの父親について考える」，『小児看護』35（10），1339-1345.

World Health Organization (2001) “International Classification of Functioning, Disability and Health (ICF).”（障害者福祉研究会（2002）『国際生活機能分類（ICF）：国際障害分類改訂版』，中央法規出版）.

Winnicott, D.W. (1965) “The Maturational Processes and the Facilitating Environment”, London: Hogarth Press（牛島定信（訳）（1977）『情緒発達の精神分析理論』岩崎学術出版社）.

表３　文献一覧

発行年	執筆者	論文題目	文献の分類		区分		領域		
			学術研究	雑誌記事等	臨床	理論	保育	療育	教育
1993	鯨岡 峻	発達研究の現在：関係発達論への転回	○		○				○
1995	川瀬 泰治	関係発達論としての自閉症研究	○			○		○	
1999	鯨岡 峻	初期「子ども－養育者」関係研究におけるエピソード記述の諸問題	○		○				○
2002	渡辺 恭子 本城 秀次	音楽療法における関係発達に関する一考察：精神分裂病患者を対象とした音楽療法から	○		○			○	
2003	小林 隆児	関係発達臨床からみた自閉症とことば		○	○			○	
2003	財部 盛久	母子関係発達支援の立場から		○	○			○	
2004	鯨岡 峻	次世代育成の問題：いま、何を育てる必要があるのか	○			○			○
2004	鯨岡 峻	関係発達論と保育のあり方		○		○	○		
2004	小林 隆児	自閉症に対する育児支援：関係発達臨床の立場から		○	○			○	
2004	南部 真理子	子どもの虐待における人間の関係性：プレイセラピーにおける「枠組み」づくりの再構築	○		○			○	
2005	乾 真実 小林 隆児	落ち着きのない子どもへの家庭での教育：関係発達臨床の立場から		○	○			○	
2005	小林 隆児	関係発達臨床からみた自閉,多動,虐待		○	○			○	
2005	小林 隆児 井上 玲子 稲岡 勲	発達障害児の育児支援における母子交流の質的検討の重要さ		○	○			○	
2005	田中 康雄	AD/HD臨床から：生きにくさの検討		○	○			○	
2006	稲垣 由子	乳幼児期における心の育ち		○		○			○
2006	小林 隆児	関係発達臨床からみた自閉症とことば		○		○		○	
2006	小林 隆児 勝又 基与美	関係発達臨床の立場から：ある高機能自閉症の子をもつ母親の手記より		○	○			○	
2006	庄司 順一	ライフステージと心の発達		○		○			○
2007	市川 友里恵	自閉症児の言語使用の経緯と他者との関係性：「てててて」から「帰る」へ	○		○			○	
2007	鯨岡 峻	発達障碍とは何か：関係発達の視点による「軽度」の再検討		○		○		○	
2007	南部 真理子	虐待を受けた子どもの関係発達論：関係発達臨床から	○			○		○	
2007	三原 敏孝	自閉症児の遊戯療法過程：関係発達論の視点から	○		○			○	
2008	小林 浩之 上野 ひろ美	関係論的把握に基づく「子ども－保育者」関係の一考察	○			○	○		
2008	小林 隆児	関係発達臨床からみた共同注意	○		○			○	
2008	城間 園子 浦崎 武	発達障害児への関係発達的支援アプローチ：子ども・母親の情動に焦点をあてた支援を通して	○		○			○	
2008	南部 真理子	虐待を受けた子どものプレイセラピーにおける「枠組み」の再構築	○		○			○	
2008	細渕 富夫	重症児教育（療育）実践の動向と課題	○			○		○	
2009	浦崎 武	学齢期のアスペルガー症候群と関係発達的支援		○	○			○	
2010	藤井 真樹 勝浦 眞仁 山崎 徳子 平野 拓朗	関係発達研究にかかる「聞主観性」概念の現状と可能性：子どもの自己形成過程における意味に着目して		○	○				○
2011	大鍵 啓伸	母子通園施設を利用した母親の心理状態：支援過程において障害児を持つ母親の表出された気持ちから	○			○		○	
2011	小林 隆児	ひきこもりと広汎性発達障碍：関係障碍に対する関係発達支援の実際		○	○			○	
2011	近藤(有田) 恵	実践を支える研究：関係発達論とエピソード記述が持つ意味	○			○		○	
2011	榊原 久直	自閉症児と特定の他者とのあいだにおける関係障碍の発達的変容：相互主体的な関係の発達とその様相	○		○			○	
2012	渡部 千世子	慢性腎疾患の子どもの父親について考える	○		○			○	
2013	北川 可恵 光澤 博昭 新谷 朋子 海崎 文 氷見 徹夫	当センター母子入院における重複障害児の補聴器装用指導	○		○			○	
2013	小林 隆児	「甘え」のアンビヴァレンスと心理療法に関する関係発達臨床からの検討		○	○			○	
2013	榊原 久直	自閉症児と特定の他者とのあいだにおける関係障碍の発達的変容（2） ：主体的能力・障碍特性の変容と特定の他者との関連	○		○			○	
2013	榊原 久直	前言語期のWest症候群のある子どもへの心理臨床的関わりへの一考察：関係発達臨床の視点から	○		○			○	
2014	梅崎 高行	関係発達論に基づく保育実践と発達研究の協働	○		○		○		
2014	塚田 みちる	実習における〈子ども−実習生との関係〉の検討：保育実習・教育実習での体験をエピソード記述で描く	○			○			○
2015	塚田 みちる	乳児の情動の調整における〈調整する−される〉という関係の検討：生後半年間における三世代の関わりをめぐって	○		○		○		
2016	浦崎 武 武田 喜乃恵	学齢期の自閉症スペクトラム障害児への関係発達的支援 と「自立活動」による教育実践 ：「ともに楽しむ」体験と「向かうカー受けとめる力」を育む「トータル支援」	○		○			○	
2016	浦崎 武 武田 喜乃恵	学齢期の自閉症スペクトラム障害児への地域の特色に基づく支援：関係発達的支援と教育の実践に向けて	○		○			○	
2017	浦崎 武 武田 喜乃恵	自閉症スペクトラム障害児への関係発達的支援による集団支援と教育実践 ：「トータル支援」を通した「過ごす力」と「向かう力」を育む支援論	○		○			○	
2017	浦崎 武 武田 喜乃恵	自閉症スペクトラム障害児の自己同一性の形成の解明と学齢期の関係発達的支援の開発 ：幼児期からの関係発達的支援および教育実践への展開に向けて	○		○			○	
2017	小林 隆児	発達障碍の精神療法：その難しさはどこにあるのか	○		○			○	
2017	中島 由宇	知的障碍をもつ成人女性と母親への関係発達支援	○		○			○	
2017	吉田 安規良 中尾 達馬	沖縄こどもの国と連携した教職実践演習における学生の変容の実際 ：学生は教職実践演習で自他をどう見取ったか：2015年度の報告と4年間の取組の総括	○		○				○
2018	大倉 得史	育ち育てられる関係発達の視点	○			○	○		
2018	宮本 俊光	算数・数学の授業実践のための関係発達論に基づく情報環境の構築		○	○				○
2019	石川 大晃 田中 大介	「親として育てられる」社会的枠組みの重要性とその再構築の試み	○			○			○

関係発達論に関する研究の動向

A Systematic Review for the Researches on the Theory of Relational Development

竹　　美　咲*1・村　山　　拓*2

TAKE Misaki and MURAYAMA Taku

特別ニーズ教育分野

Abstract

This paper aims at the systematic review for the researches based on the theory of relational development through the literature review for the relative articles. Through the overview, the possibilities and issues on the relational developmental model would be revealed. Collecting data are through the database CiNii and the detailed survey, 51 articles are extracted finally. Through the reviews, the brush-up for the methodology are expected, and the viewpoint of the relational development are to be more emphasized in the practical condition of education.

After having been formed by Kujiraoka (1999), the research with the view of the relational development, and the research method and attitude are implemented into the researchers and practitioners in the field of education, medicine, and the related areas. The theory of relational development are understood as the shift of the developmental views on the one hand, some researches are in the ableism or the behaviorism for the way of the understanding for the theory of relational development and it shows the methodological issues of the theory of relational development.

Keywords: Theory of Relational Development, Literature Review, the Developmental Viewpoint

Department of Special Needs Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨： 本研究の目的は，国内における関係発達論に関する研究の動向を，関連する文献をレビューすることを通して探ることであり，それらの概観から，関係論的発達モデルの可能性と課題を明らかにすることをねらいとしている。本稿では，関係発達論に関する文献のレビューを行う。文献収集は，学術論文データベースCiNiiを利用して行い，関係発達論に関連のある論文51件を最終的に抽出した。これらのレビューから，方法論的な練り上げがさらに必要であるとともに，関係発達論の視点は今後さらに重要となる可能性が示唆された。

鯨岡（1999）によって構築された関係発達論に関する学術研究は増加傾向にあり，教育・医療など分野をまたぎ研究者や実践者に受け入れられてきたことが明らかとなった。しかし関係発達論を発達観の転換として捉える研究がある一方で，関係発達論の理解によって最終的に能力主義に回収されていたり，行動水準での分析に留まる臨床研究も見られ，方法論的な課題も明らかとなった。

*1　Tokyo Gakugei University, Research Associate
*2　Tokyo Gakugei University, Department of Special Needs Education

キーワード: 関係発達論，文献レビュー，発達観